



臨終凶巻

「なんで医者なのに、死ぬ話ばかりやっているんだ？」と聞かれることがあります。「医者」は病気を治すのが仕事だろうか？死のことなんて、お坊さんに任せておけばいいんだよ」と皮肉まじりに。

果たして本当にそうでしょうか。死と向き合わない医療者があまりにも多いから、

死の直前まで過剰な延

命治療を続けた結果、

余計に患者さんを苦し

ませてしまう。そんな

現状を打破したくて

「痛くない死に方」や

「平穏死」と題した本

を数冊書いてきました

。死は、お坊さんだ

けの仕事ではなく、医

者の仕事でもあると思

うのですが。

43 田中雅博



長尾和宏（ながお・かずひろ）
東大医学博士、大阪第二病
院第二内科局長。1995年、
京都府立総合医療センター
に在籍。外来診療まで「人
を診る」総論をまとめた著
「痛くない死に方」は、関
西国際大学客員教授。

そんな批判をいただくたび、

思い出す顔があります。医師と

僧侶の二足のわらじを履いたま

ま逝かれた田中雅博さん。内科

医で、栃木県益子町にある西明

寺の任職でした。テレビにもよ

く出演されていたので、ご存じ

の方も多いでしょう。2017

年3月21日、70歳で逝去。膝臓

（すいぞう）がんでした。

数年前、ある医学会のシンポ

ジウムと一緒に登壇したことが

ご縁で、意気投合しました。

「死ぬのが怖い」と訴えてくる

患者さんにどんな言葉をかけた

らいいのか？ 正解のない問い

を日々模索しているのだといわ

れる田中先生に、なんだか私と

似ているなと感じました。

寺の息子として生まれた田中

先生は、父親の勧めもあり医学

部に入り、1974年に国立が

んセンターに入職しました。し

かし、がんの治療法も少なく、

治る見込みのない進行がんの人

を相手に日々絶望に暮れていた

そうです。「肉体的苦痛を抑え

ることは医者にできますが、い

のちの苦しみ、いわゆるスピリ

チュアルペインを救うこ

とは、医者にはできない

と気が付きました」。父

親が医者になれと言った

理由も、このあたりにあ

ったのでしょうか。

父親が亡くなった後、

田中先生は東大に入

学して仏教を学び、19

83年に西明寺を継ぎます。7

年後には、なんと寺の中に普門

院診療所を建てました。外来の

診療だけではなく、緩和ケアを

提供する19床の病棟を作り、介

護施設と連携させたというから

驚きです。東日本大震災以降

は、臨終宗教師の育成活動も熱

心に行っていました。

2014年にステージ4bの

膝臓がんが見つかった後も、自

らの闘病をすべて公にしなが

ら、執筆活動や講演会などで、

より精力的にいのちのケアにか

かわっておられました。私の方

が「逝くのは先ですよ」と笑い

ながら、ギリギリまでがん患者

さんの声を聞いていました。

普門院の普門とは「すべての

人に開かれている門」という意

味があるそうです。死に医師も

僧侶も関係ない。一人の人間と

して、目の前の患者さんの痛み

と苦しみにただただ患直に向き

合えばいいのだ、と田中先生か

ら教えられたような気がしま

す。

苦しみをケアした「僧侶医師」